

座長のまとめ（8－10）

戸川 清（秋田大）

本群は現今脚光を浴びているステロイド剤スプレーの局所及び全身への影響に関する指定演題である。

上出ら（京府医大）はステロイド剤ネビュライザー長期使用が線毛運動に及ぼす影響につき、純系マウス鼻腔組織培養下に位相差顕微鏡で6日間観察し、プレドニゾロンは0.1%が線毛運動障害可逆の上限で、障害様式も直後より24時間後が強く、永続するが、デキサメサゾンでは0.4%でも回復し、障害様式は直後に起るが可逆性で、後者が使用薬剤としてより適すること、更にベクロメサゾンの影響もデキサメサゾンと同様に少なく、有用であると述べた。齊藤（医歯大）のベクロメサゾンの場合使われる噴射剤の影響はとの間に対し、その影響を避ける工夫が述べられた。坂倉（三重大）のデキサメサゾンの一過性線毛運動低下作用機序の間に、溶媒その他によると思われるが、未検討の由であった。本題はネビュライザー実施上に有用な情報与えた貴重な発表であった。

齊藤ら（医歯大）は新局所性ステロイド剤フルニソライド400 μ g/日を4週連用し、その影響を血清コルチゾールその他の測定から検討し、これらの値に影響を及ぼさないことを示した。通常臨床用量の2倍での成績であるから、少なくとも4週使用は安全であろう。戸川（秋田大）の10月の第2回ISIANでの1年余長期使用報告における副作用情報は、との間に、ベクロメサゾンとほぼ同様で、副作用の少ない薬剤であるとした。本題は従来の倍の期間使用時の全身への影響に関する基本データの呈示であり、本剤の安全性を証明した。

佐藤ら（神戸常盤短大）はアルデシン鼻内噴霧剤の粒度分布を製造後1年と2.5年のサンプルで比較し、いずれも平均15 μ の対数正規分布で、鼻内沈着を目的とする適正粒度範囲であったとした。また模型鼻腔に噴霧された粒子濃度の入口・出口の比率から捕集効率を求めた。間島（三重大）の鼻腔のどの部分に沈着するかとの間に、現在実験施行中とのことであり、次回御披露をお願いする。齊藤（医歯大）の鼻内捕集効率を高めるにはとの間に、粒子を大きくし、加圧を増すことであるが、他に鼻腔形態など影響因子があろうとした。本題はエアロゾル研究の基本因子の研究であり、効果向上のデータ設定が望まれる。

以上3題はいずれもステロイド剤鼻内噴霧に関する基本的問題の検討であり、それぞれにある程度の説明がなされたことを喜ぶとともに、次の機会に研究の進展がうかがえることを期待する。